Impact Report

2025

教室から世界を変える



TEACH FOR JAPAN IMPACT REPORT 2025

子どもたちの学びを支える力に

ご寄付はこちら

最新の活動情報・各SNSなど

公式サイトはこちら

Teach For JAPAN



Vision

すべての子どもが、素晴らしい教育を受けることができる世界の実現



Impact Report 2025

教室から未来を描く

日頃より、Teach For Japan（TFJ）をご支援・ご協力いただいている皆さまに、心より御礼申し上げます。今年度より、私たちはこれまでの「年次報告書（アニュアルレポート）」を、「インパクトレポート」へと改めました。TFJの歩みを、単なる活動報告ではなく、教室で生まれた変化が、学校、自治体、そして社会へと広がっていくプロセスとしてお伝えしたいと考えたからです。学校現場には、教員不足、働き方改革とやりがいの両立、すべての子どもの学習権の保障、地域間の資源や機会の違いなど、向き合うべき「コト」が数多くあります。一方で、教育現場を批判するだけでは、未来は描けません。全国には、より良い未来を実現しようと挑戦する学校や、前例にとらわれず改革を進める自治体が確実に増えています。TFJは、そうした挑戦を喚起し、現場の実践から希望を生み出し、変化のモメンタムを高めていきます。そして、その変化を生み出すのは「人」です。私たちは、単に教員を増やすことを目的とした団体ではありません。想いを持ったフェローが、教員として教室で子どもたちと出会い、日々の実践を通じて原体験を重ねる。その経験は、フェローにとっては、教育課題や社会のあり方を自分ごととして捉え、生涯にわたりより良い社会づくりを担う力となります。同時に、子どもたちにとっても、自分の可能性に気づき、未来を描き、社会をつくる当事者として歩み出すきっかけになります。教室は、フェローと子どもが互いに影響を与え合い、ともに未来をつくる場所なのです。フェローシップ・プログラムの参加者は、2026年に400名を超えます。修了生は、学校現場、教育行政、民間企業、ソーシャルセクター、政治など、さまざまな場所で社会をつくる当事者として歩み続けています。そして、フェローたちが出会ってきた60,000人を超える子どもたちもまた、それぞれの人生を歩んでいます。本レポートでは、教室での出会いや原体験が、フェローと子ども双方の人生にどのような影響をもたらしているのかにも目を向けています。この歩みは、一人ひとりの個別の挑戦にとどまりません。異なる立場の人々がつながることで、コレクティブ・インパクトによるシステムチェンジが生まれ始めています。それは、「すべての子どもが、素晴らしい教育を受けることができる世界」の実現に向けた、変化のプロセスです。TFJはこれからも、教室を起点に、人と社会の変化を生み出していきます。本レポートでは、私たちが皆さまとともに歩んできた挑戦の現在地と、その先に広がる可能性をお届けします。教室から世界を変える。その歩みを、引き続きご一緒いただけましたら幸いです。



Teach For Japan 代表理事

中原 健聡

フェロー第 3 期生。修了後は、札幌新陽高校で学校経営・開発に携わり、2019 年より Teach For Japan の CEO に就任。公教育の改革、社会課題の解決に挑戦している。

Global Network

Teach For Japanは、1990年にアメリカで始まったTeach For Americaによる教育格差の解消に向けた活動を背景に、世界63カ国へ広がるTeach For Allグローバルネットワークに加盟しています。日本での実践から得た知見を世界中のパートナーと共有し合いながら、国や地域を越えて、すべての子どもたちがよりよい教育を受けられる世界の実現に向けて活動しています。



Journey



すべての子どもの学習権を保障するために Teach For Japan が取り組むこと

01 多様な人材を教育現場へ

多様なバックグラウンド・経験を持つ人材を、教員免許の有無に関わらず募集・選考し、研修を提供して全国の学校へフェロー(教師)として送り出します。

02 教育の質を高める実践改善

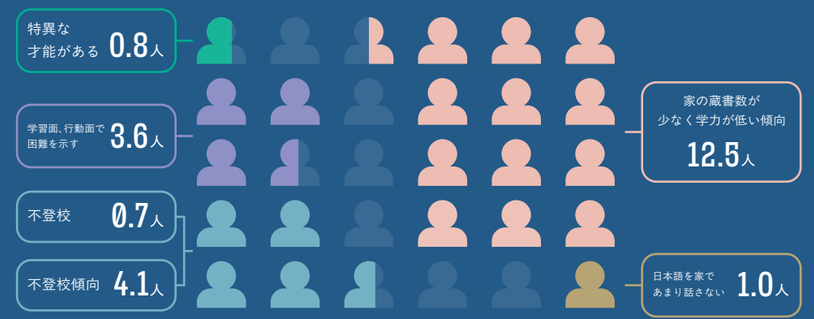
子どもたちとの教育実践を互いに共有し、対話と内省を重ねながら実践を改善し、現場でリーダーシップを発揮し続ける力を育みます。

03 公教育のシステムチェンジ

社会全体で公教育を支えるために、人材の養成・採用・研修の一体的な改革から、子どもの学習権、教育の質に関わるシステムチェンジに繋げます。

Theory of Change

小学校35人学級における子供の多様性



教室には、様々な特性や関心・意欲を持つ子どもたちがともに学びます。
その前提に立ち、すべての子どもの学習権を保障できる公教育の実現が求められています。

出典：文部科学省「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」をもとに TFJ 作成

これまでの時代の教室



- そろえる教育
- 同一学年での画一的な学び
- 同質的 / 均質な教職員組織

System Change

これからの時代の教室



- 可能性をひらく教育
- 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実
- 多様な人材による協働体制

Fellowship Program

複雑化する教育課題に向き合うためには、多様な人材が主体的に教育に関わる社会が求められます。Teach For Japanは、学び続けるマインドを持った教育の担い手を教育現場に送り出すフェローシップ・プログラムを運営し、社会全体で教育を支える土壌づくりに取り組んでいます。

採用

教育への想いを持つ多様な人材を
教員免許の有無を問わず選考



研修

仲間との対話と実践を通して
学び続ける教師を育む



赴任

自治体と連携し、教師を教室へ
送り出し、実践を支える



教室から広がるインパクト

修了生たちは教室での実践を起点に、
多様なフィールドでつながりながら、すべての子どもが輝ける社会を育んでいきます。



Logic Model

活動	アウトプット	短期アウトカム	中期アウトカム	長期アウトカム
フェローの募集・研修 自治体連携	活動地域 赴任校数 赴任フェローの数 関わった児童生徒数	個別最適な学びと協働的な学びの一体的な実践	子どもたちの非認知能力の向上	新たな学校教育体制の推進

Impact in Numbers 実績

GOOD DESIGN AWARD 2023

KIDS DESIGN AWARD 2024

活動地域
27 都道府県

赴任校数
95 校

学校長評価
学校長から標準以上の
評価を受けたフェローの割合
95 % +

赴任したフェローの数
101 名

教職員集団の多様性の向上
赴任したフェローの内、
民間企業等の
勤務経験者の割合
81 %

フェローの付加価値
児童生徒の
非認知能力に対する影響
+.342

直接関わった児童生徒数
8,389 名

Core Values

学校現場の多様性の向上

日本の新規採用教員のうち民間企業等勤務経験者は約 4%。TFJ フェローでは 81% を超え、多様な背景や専門性を持つ教職員集団の構築を推進し、新しい視点や社会との接続をもたらします。

Competency-Basedの教員養成

独自の研修設計により、通常は 2 年から 4 年を要する一般的な教員養成より、短期間で同等以上の教師としてのコンピテンシーを育んでいます。

実践とデータに基づくプログラム改善

学校長評価、児童生徒アセスメント、フェローの実践記録を分析し、選考基準・研修内容・赴任中支援を継続的に改善します。学校現場での実践と検証を次の育成設計に還元する、臨床的・実証的プログラムです。個人の勘や経験則に頼らず、実践知とデータに基づいて質を高め続けています。

越境型の専門的協同学習体

異なる学校に赴任するフェロー同士が、学校や地域の枠を越えて継続的に学び合います。互いの実践や子どもの学びの変化を持ち寄り、対話・省察・改善を重ねる協同的探究を通じて、状況に応じて実践を更新し続ける適応的熟達を育みます。

Training 研修について

研修概要

赴任前・赴任中・修了後を一体的に捉えた研修設計のもと、学習科学の知見を基盤に、教師に求められる資質・能力に基づくコンピテンシー・ベースの研修を実施しています。赴任中は、理論と学校現場での実践を往還しながら、専門性を適応的に高め、修了後は、プログラム期間の経験を起点に、学校・地域・教育システムを相互に関係するものとして捉えるシステム思考を深め、周囲と協働しながら変化を生み出すコレクティブ・リーダーシップを発揮していきます。

専門的協同学習体 × 越境による学習



異なる学校に赴任するフェロー同士が、越境して継続的に学び合う独自の研修設計

候補生コメント



高野 剛志 さん

普遍的に人と話す機会は日常的に存在し、その会話が重要であることは認識していましたが、研修で『対話』に対する理解を深め、自分では到達し得なかった学びを獲得出来た経験により、『対話』による学びを明確に認識することが出来ました。そして『対話は、あらゆる場面に適応し、学びを深めることが可能である』という価値観を獲得し理解できたことが成長であり、財産であると考えています。



齋藤 まゆみ さん

研修期間中に自分自身の現在地をメタ認知する機会があり、自分が目標とし考えていたことだけがすべてではないと感じました。それ以降は、仲間から学びたいという気持ちが増し、様々な価値観や教育観の背景にあるものに積極的に触れ、コーチングを通し自分の人生を見直す機会を持ったことで、今後どのような形で社会に貢献していきたいかという考えが変わりました。私にしかない経験と価値観を持って実現したい未来が、より広義になったと感じています。

短期アウトカム

＃安心できる教室 ＃自立を育む ＃ワンチーム



Vision

みんなの、子ども達の笑顔があふれる世界をつくる



フェロー第13期生　小学校赴任

渡辺 恵美さん　Emi Watanabe

私が 8年前から掲げているビジョンは「みんなの、子ども達の笑顔があふれる世界をつくる」です。いつも思うことは「子どもは大人をよく見ている」ということ。だからこそ、子ども達だけではなく大人を含めた「みんな」の笑顔が大切です。
学校教材出版社での勤務を経て、速読教室の経営を始めた８年前にビジョンを強く意識するようになりました。その想いがどんどん育ち、学校現場で直接子ども達や保護者の方と接したいと思い、教員として働くことにしました。
赴任先へ初めて挨拶をした際に校長先生から「特別支援学級の担任をお願いします」と言われました。この言葉を聞いた時、「少人数だからこそ、子ども達や保護者の方々とじっくり向き合っていける。うれしい！」と思いました。
教員として働くと決まった時から私は、保護者の方とたくさん対話をしたいと思っていました。もし保護者が悩み困っていたら、たくさん話を聞いて少しでも解決に向かう努力を一緒にしたい。そして、子ども達にとっていちばん身近な保護者の方々に笑顔でいてほしいと思っていました。その笑顔が子ども達に伝わるからです。

私の学級は１年生・２年生・３年生の児童が計８名います。新年度を迎える前に数人の保護者とお話しする機会を持てました。子どもが興味のあること、得意なこと、苦手なことを教えてもらい、どのような支援や配慮が必要かを相談しました。そして私がいちばん大切にしたい、「子ども達が安心して楽しく通えるよう、教室を居心地のよい場にしたい」といった想いを聞いてもらいました。そして、ここは子ども達の自立を支援する場であり、子ども達が自立に向けて学習するための場所です。そのため、これだけは守る！ということを決めて、そこに関しては厳しく注意をしていく旨もお伝えしました。ここについても保護者の考えを聞いて、足並みを揃えていくようにしました。
特別支援学級の担任になってもうすぐ丸１年が経ちます。８名の子ども達の保護者とほぼ毎日、連絡ノートでのやりとりをしています。子どもの家での様子と学校での様子を共有することで、今の状態が子どもにとってどうなのか？をいつも確認しあっています。ノートにうまく書き表せない時は、電話で伝えます。
今は「子どものために共に！」が合言葉のようになっていて、保護者の方々と子ども達と私がワンチームになっている感じです。それが子ども達に伝わっているようで、お家では学校のことを、学校ではお家のことを楽しそうに話してくれています。それがとてもうれしいです。
「みんなの、子ども達の笑顔があふれる世界をつくる」ため、これからも笑顔で励んでいきます。



保護者の方との連絡ノート

＃学び方を学ぶ教室　＃自ら問いを立て試行錯誤する
＃学習科学の理論



Vision

誰もが「正解のない問い」を面白がり、自ら人生の手綱を握って歩める社会をつくる



フェロー第12期生　小学校赴任

會澤 一晃さん　Kazuaki Aizawa

フェローとして赴任前の 14 年間を会社員として過ごしました。後半は会社の大きな変革期で、本社管理部門に所属し経営層と現場を繋ぐ仕事をしていました。組織の最前線で学ばせてもらう中で意識したのは、日本企業の強みだった「指示を正確にこなす」能力が、激動の時代には個人や組織の成長を妨げる壁にもなり得るということです。指示待ちではなく、自ら問いを立て、試行錯誤できる人材を育てたい。在職中に抱いたこの問いを胸に、私はフェローに応募しました。

当初、教室で目にしたのは、かつての自分のように正解を求め、失敗を恐れる子どもたちの姿でした。そこで私は、子どもたちに、様々な場面で自ら考え判断することを求めるようにしました。

例えば、宿題です。指定されたページを解く方式に違和感を覚えていた私に、同期フェローが「けテぶれ学習法※」を紹介してくれました。「今の自分に必要な学習を自分で選ぶ」スタイルです。まだ全員が自走できているわけではありませんが、数人の児童が、「ここをよく間違う」「勘違いに気付いた」と自らを分析し、戦略を立て始めた姿に確かな手応えを感じています。同時に、私自身の学習観も変わりました。子どもは「学び」に対して決して受動的ではなく、本来学びたい意欲を持っていること。そして「学び方」を学ぶことで、自立して学び続けられるようになるということです。TFJ の研修で取り組んだ学習科学の理論と実務が見事に繋がりました。

同僚の先生方にも恵まれました。運動会で職員種目を企画した際も、多忙な中で私の提案の実現に協力してくださいました。児童や保護者からも高評価をいただき、仲間と一つの場を創り上げる喜びを分かち合うことができました。こうした試行錯誤の中で、私自身の表情も変わったようです。妻からは「以前より笑顔が増えたね」と言われます。大人が仕事を楽しむ背中を見せることこそが、将来に不安を抱く子どもたちへの最高のメッセージになると確信しています。

フェローの 2 年間で痛感したのは、「個」の変容を支えるには、「全体」としての教育システムの改善が必要だということです。かつて勤めた会社では、システムを整えることで組織が本来の輝きを取り戻し、力強く再生していく過程を間近で見ることができました。修了後も教員を続けますが、二つの現場での経験を糧に、将来的には教育行政にも携わり、より大きな枠組みから「個の変容」を支える仕組みづくりに貢献したいと考えています。

挑戦の機会を与えてくれた TFJ、赴任校、前職の会社、そして家族には感謝しかありません。子どもたちによりよい教育を届けることで、恩返しをしたいです。



教室内の掲示物

※「計画（け）→テスト（テ）→分析（ぶ）→練習（れ）」を繰り返しながら学ぶ方法

＃自ら育つ教室　＃主体的・対話的で深い学び
＃人の成長を支える



Vision

人が自分の可能性を信じ、共に未来を創り出す社会を実現したい



フェロー第12期生　小学校赴任

佐古 卓也さん　Takuya Sako

長く教育業界で人と組織の成長に携わってきた経験の中で、「子どもたちの未来にもっと直接的に貢献したい」という思いが年々強まっていきました。教室運営から人財開発、事業推進まで幅広い領域に関わりながらも、教育の中心にいる子どもたちの姿が常に心に残り続けていました。Teach For Japan と出会い、「すべての子どもが、素晴らしい教育を受けることができる世界の実現」というビジョンに深く共感し、53 歳でフェローへの挑戦を決意しました。現在は埼玉県の公立小学校で教壇に立ち、子どもたちとまっすぐに向き合う日々を送っています。

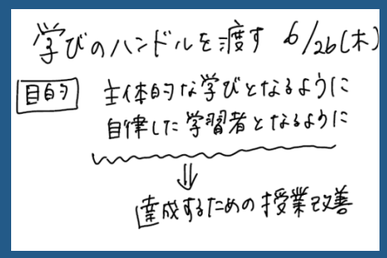
着任後、目の前の子どもたちと向き合う中で、これまでの生い立ちや家庭環境に課題を抱える子が多い一方、互いに優しさを持ち、素直さを備えている姿に気づきました。しかし、学びへの意欲は高くなく、「自分にはできない」と思い込んでしまう子も少なくありませんでした。だからこそ、私は目指す教室を「子どもを育てる教室」ではなく、「子どもが育つ教室」と定めました。教師が何かを“与える”場ではなく、子ども自身が自らの力に気づき、伸ばしていく場でありたいと考えています。

育みたい子ども像として掲げたのは、「自分で考え行動できる子」と「互いを尊重し合える子」。その実現のために、授業づくりでは主体的・対話的で深い学びを意識しています。学ぶ楽しさや意義を感じられるようにするために選択肢を提示し、自分で選ぶ経験を積ませること。対話や協働を通して他者の考えに触れ、互いの違いを尊重し合うこと。そして、自分の学びを振り返り、次にどう生かすかを考える習慣を育てること。こうした積み重ねが、子どもたちの自己肯定感や主体性を育むと感じています。

日々の実践の中で、子どもたちに小さな変化が生まれてきました。「自分で考えて決めてみたい」「友だちと一緒に活動したい」といった声が増え、教室の空気が少しずつ変わっていくのを実感しています。

私が大切にしている価値観は、「自分らしく生きる」「相手の立場に立つ」「まっすぐに人と向き合う」という三つです。これはこれまでのキャリアで育まれたものであり、教室に立つ今、その意味をより深く感じています。子どもたちは大人の姿をよく見ています。だからこそ、まず自分自身が誠実に、そして自分らしく生きる姿を示すことが、子どもたちの未来につながると信じています。

これからも、教育とキャリアの両面から人の成長を支えるという使命を胸に、子どもたちが自分の可能性を信じ、未来を描けるような学びの場づくりに取り組んでいきたいです。



同僚の先生との議論メモ

Voices from School 学校の声

出会いから育まれた、教師としての確かな歩み

校長先生の声



茨城県取手市立取手西小学校 校長
伊藤 誠 さん

本校フェロー T 先生との出会いは、市教育委員会で人事を担当しているときでした。「TFJ の研修を修了し小学校勤務を希望している男性がいます。採用を検討いただけますか。」すぐに面接の日程を決めT先生とお会いしました。企業マンとして培った社会性、教員としてのセカンドライフへの強い覚悟、そして何よりもご家族の温かい後押し。どれもが印象深く、是非本市の子どもたちのためにご尽力いただきたいと思いました。T先生が新採講師としてスタートした本校。そこに私も校長として現場復帰になりました。当初は戸惑いながらの学級経営だったと思いますが、秋が深まった頃にはすっかりT先生のクラスになっていました。1年目で小学校教諭免許を正式に取得し、２年目には体育主任として子どもたちが主役となる素敵な運動会を演出してくれました。また、同時に本県の教員採用試験に合格することもできました。T先生のご家族からは、感謝のお手紙を頂戴し感激の涙が出ました。今後の活躍がとても楽しみなT先生。TFJからいただいたこの出会いに心より感謝しています。

子どもの挑戦を支え続ける、あたたかなまなざし

保護者の声

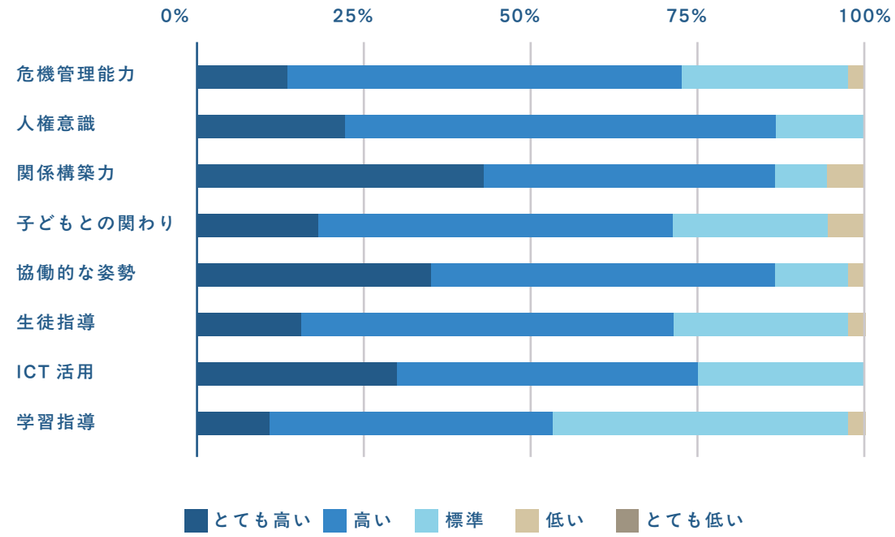


フェローのクラスの保護者

羽毛田先生（フェロー）は、子どもと同じ目線に立って向き合ってくれる先生です。小5の娘は先生と共通の好きなアーティストの話題で盛り上がったことを、いつも嬉しそうに話してくれます。また行事にはとても熱く、運動会の団体競技の練習がうまくいった時には先生が感動して泣いてくれたと聞きました。親として、子どもの成長を本気で願い見守ってくださる先生に担任していただけたことをありがたく感じました。先生はよく子どもたちに「やらない後悔よりやって大成功！」と伝えているそうです。やって失敗してもそれは成功のもとになるから結果大成功という教えのおかげで、娘もさまざまなことに挑戦する一年間を過ごすことができました。小5になると多感な時期に入り、初めはどうなるか心配もありましたが、クラスの雰囲気は明るく真っ直ぐで、一生懸命なことが恥ずかしくない空気があり、とても安心しました。先生の常に笑顔で真摯に向き合う姿勢が、子どもたちにも自然と伝わっているのだと思います。

95%以上が「標準以上」と評価。校長評価から見えるフェローの実践力

フェローに対する校長評価では、全8観点で95%以上が「標準以上」と評価されました。特に、児童生徒との信頼関係づくりや教職員との協働、人権意識に関する項目で高い評価が集まっています。子どもと向き合う日々の実践に加え、学校組織の一員として周囲と関係を築きながら、教育活動に貢献していることが数値からも示されています。



校長先生の評価

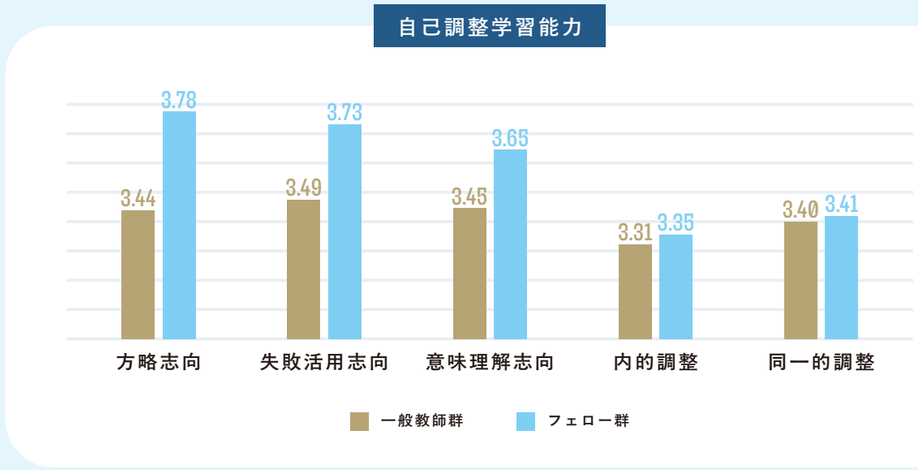
業務への迅速な対応や、生徒への声かけ・授業準備に熱心な姿勢から教育への強い情熱が感じられます。アドバイスを真摯に受け止め、改善に努める素直さがとても印象的です。

誠実で児童生徒理解を大切にしており、子供たちや教職員からの信頼が厚い。また、新しいものを吸収して仕事に活かす視点がすばらしい。

だれも取り組んだことのない学びの創造について、不安を恐れず、何事にも前向きに取り組み子どもたちのためになるには、と考え続ける姿勢はこれからの時代には必要な教員としての資質だと思う。

Mid-term Outcome

子どもたちの非認知能力への影響

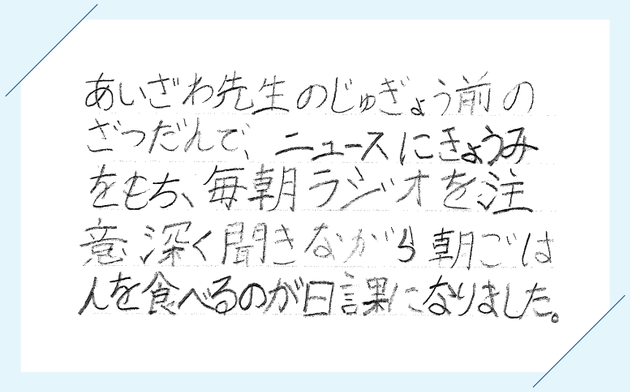


フェローの教室で育まれる、自ら学ぶ力

フェローの教室の子どもは、外的な要因による学びに向かう力よりも、内的な要因による学びに向かう力が高く、丸暗記によるテスト結果よりも、学習方法と意味の理解を重視する志向が強くなっています。

方略志向	目標達成のために効率的なやり方を自ら選択し、試行錯誤する姿勢。学習方法（方略）やプロセスを重視する考え方。
失敗活用志向	失敗を「能力不足」や「悪いもの」と捉えず、成長のための情報として捉える考え方。
意味理解志向	学習内容の「なぜ」「どういう原理か」という本質的な意味を深く理解することを優先する姿勢。
内的調整	自分の興味、好奇心、または学習そのものの楽しさに基づいて、主体的に学習活動を管理・コントロールする状態。
同一的調整	学習が目標や自分自身にとって「必要である」という価値を認め、自らの意思で進んで行動する状態。

子どもたちの声





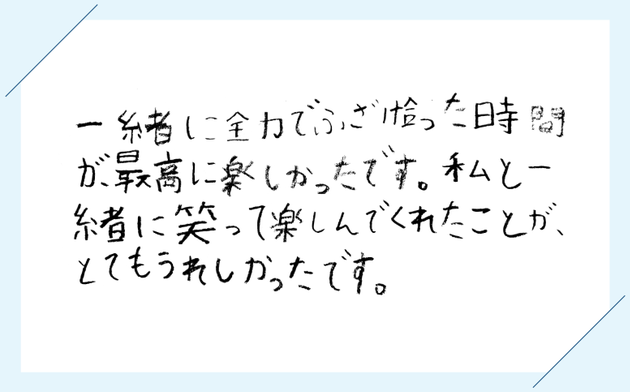
F.A さん



フェロー第12期生　小学校赴任

會澤 一晃さん

私は、子どもたちが自分で考え、「自分に必要な学び」を選べるような環境づくりを大切にしてきました。間違いや試行錯誤を通して学ぶ経験を重ねることで、自ら学び続ける力が育つと信じています。その過程を、子どもたちと一緒に楽しみながら支えていきたいと思っています。





Y.I さん



フェロー第12期生　小学校赴任

信太 謙一さん

私は、子供たちが自発的に学習へ取り組める環境設計に注力してきました。大切にしているのは、「遊びの中に学びを見出すこと」、そして「学び方を自ら選択できる多彩なパターンの提供」です。私自身も子供と一緒に全力で楽しみ、好奇心を共有することで、共に成長し続けられる場作りを目指しています。

Long-term Outcome フェロー × 校長先生



学校改革を支えた、「生徒ファースト」の共感と対話

Q.どのようなビジョンで赴任されましたか？
（山下さん）人材系企業の営業職として勤務した前職での経験を踏まえ、「自分らしさと皆らしさが生きているクラス」を学級目標として掲げていました。自分らしさは、他者に受け止められて初めて認められ、自分自身も受容できるものだと感じています。そうした経験に自分も生かされてきたからこそ、それを授業や学校生活の中で体現していきたいと考えていました。

Q.校長先生はどのようにご覧になっていましたか？
（校長先生）「共感力」が高く、生徒一人ひとりと対話しながら、その背景を理解しようとする姿勢がありました。その結果、クラスの雰囲気として「生徒が安心できる居場所」になっていたと思います。こういった関わり方が今後も広がっていけば、学校全体が生徒の生き生きできる場所になっていくと思います。

Q.山下さんはICT部としても活躍されたそうですね。
（校長先生）当校はコロナを契機にハード面は整ったものの、活用や業務効率化が追いつかず、ツールも乱立している状況でした。そこを山下先生が整理し、分かりやすく共有してくれたことで、業務が大きく円滑になりました。セキュリティ意識の向上も大きな変化です。
（山下さん）専門の先生と役割分担し、自分は伝え方や現場への落とし込みを担いました。前職の営業としての経験が生きたと思います。使い手の視点で整理しながら、マニュアルを残すことも意識しました。

Q.数年間で大きく学校改革を進められたと伺っています。
（校長先生）創立60周年を控え、これまで築いてきた信頼やつながりは大切にしながら、これからの時代に求められる新たなスキルや考え方も積極的に取り入れていきたいと考えています。直近では、学校のミッション・ビジョン・ポリシーを策定し、未来を見据えて方向性を整える取り組みを進めました。ただ、その作業は想像以上に大変で、先生方それぞれに異なる思いや価値観があり、私自身も揺らぎました。そうした中で山下先生が間に入り、さまざまな場面で対話を重ねながら調整してくれたんです。
（山下さん）発言や意見の背景や思いを丁寧に聞く・見る・対話することを大切にしました。その上で、自分の意図も伝えながら「守ること」「変えること」を検討し、合意点を探っていきました。
最終的には「生徒ファースト」を軸に対話を重ねていくことが重要だったと感じています。
（校長先生）教員同士の関係性もすごくよくなりましたし、職員室の空気も変わりました。山下先生がいなかったら、今の学校はないと思います！

Q.2年間の実践を経て、いかがですか？
（山下さん）教員という仕事は、生徒のため、そしてその先の社会や世界のために何ができるかを純粋に考え、行動できる仕事だと感じています。これからも、出会う先生方と学びを共にしていければと思います。



インタビュー全文はWEB記事へ ▶



幸せに生きる力を育む。教師自身の在り方が、学校を少しずつ変えていく

Q. 長田先生の第一印象を教えてください。
（校長先生）「バイタリティがあるな」というところでした。普通なら行かないような場所にも踏み込み、「そんなことやるの？」ということにも挑戦していく。学校に長くいると枠の中で考えがちですが、その外に出ていく感じが面白いと思いました。
（長田さん）自分では、思ったら止まらずに動いてしまうところがあって、それは短所でもあると思っていたんですけど、「バイタリティ」と言っていただけてとても嬉しいです。

Q. 長田先生が大切にしている思いは何ですか。
（長田さん）私が赴任してからずっと変わらず持っているのは、「全ての子どもが幸せに生きていける力をつけていってほしい」という思いです。ただ、言葉だけでは届かないので、自分の在り方や関わり方を通して伝えていこうと考えてきました。
（校長先生）その思いは日々の姿から伝わってきます。忙しくても楽しそうに仕事をしているし、本気で大事にしているんだなと感じます。

Q. どのような実践を行ってきましたか。
（長田さん）特に力を入れてきたのが生徒会活動です。授業や学級経営にはある程度枠組みがありますが、生徒会には余白がある。そこを起点にすれば、生徒が自分の思いを表現したり、挑戦したりできるんじゃないかと思ったんです。大学生にも関わってもらい、対話の機会を増やしていきました。先生には言いにくいことも、近い立場の大人には話せる。その中で、自分の思いを言葉にする場面が増えていったと感じています。それこそ、「わかりました」と受け止めるだけだった生徒が、「先生、それ違いませんか」と言うようになってきたのは、すごく大きな変化でした！
（校長先生）印象的だったのは、ある生徒が「市長に来校してもらいたい」と言い出し直接会いに行き招待状を渡して実現した場面です。一歩踏み出すことで社会が動いた瞬間でした。
（長田さん）そういう姿を見られたのは本当に嬉しかったです。一方で、実現したいことに向かって周りと協働しながら進めていく難しさも感じています。提案して、意見をもらい、また考え直す。その繰り返しの中で向き合い続けています。
（校長先生）それでいいと思います。失敗したらやり直せばいい。やらないことの方がもったいないです。長田先生の存在によって、学校の空気も少しずつ変わってきています。「それもありかもしれない」と受け止める雰囲気が生まれてきた。これからが楽しみですね。

Q. 今後に向けて
（長田さん）これからも、目の前の子どもたちが幸せに生きていくために、何ができるかを考え、挑戦し続けていきたいです。
（校長先生）長田先生には思い切ってやりたいことをやってほしい。また、Teach For Japanのように、枠にとらわれない多様な人材が関わることで学校は変わっていく。その可能性を強く感じています。



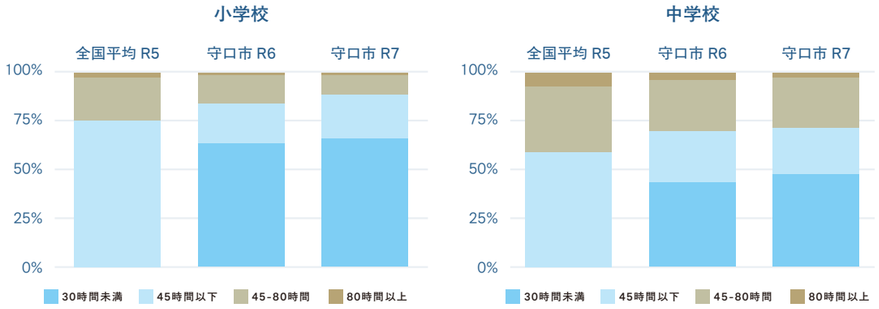
インタビュー全文はWEB記事へ ▶

Systems Change

大阪府守口市との連携

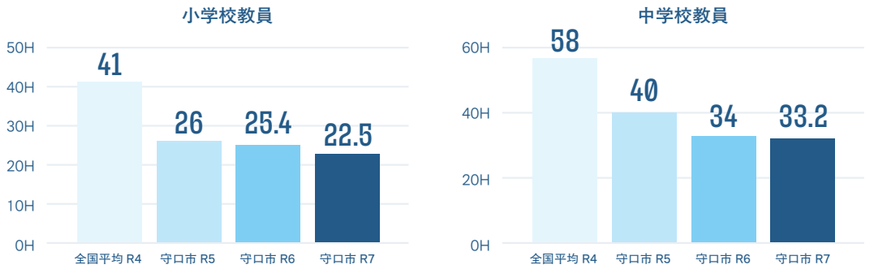
守口市教育委員会と Teach For Japan は、働き方改革と教育の質の向上を両立させ、教職員のウェルビーイング向上と持続可能な教育改革の実現に取り組んでいます。フェローシップ・プログラムを活用し、教科担任制やチーム学年担任制を推進することで、教員一人ひとりの業務負担を軽減するとともに、教職員同士が学び合う専門的学習協同体の構築を進めています。こうした取り組みの結果、守口市では、過去 3 年間、新規採用者の精神疾患による離職者ゼロという成果も生まれています。

1 カ月あたりの時間外在校時間区分別の人数割合



※30 時間未満は守口市独自調査

1 カ月あたりの時間外在校時間の平均



政府が令和 11 年度までに掲げる「月 30 時間程度」への時間外在校時間削減目標について、守口市では小学校においてすでに達成しています。月 30 時間未満の教員が約 7 割を占め、平均時間も全国と比べて大幅に低い水準となっています。中学校においても着実に削減が進み、長時間勤務の抑制が進展しています。こうした環境改善のもとで、新任教員の精神疾患による退職者は令和 5 年度から 3 年連続で 0 名となりました。教育の質は、一人の優れた教員に依存するものではなく、学び続ける教職員集団によって支えられます。守口市では、その基盤となる環境が整いつつあります。

守口市教員の声

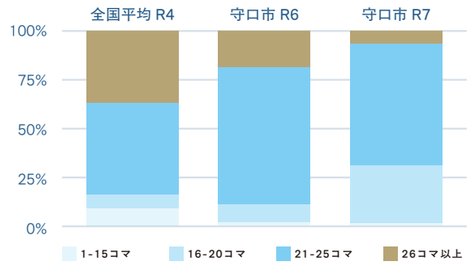
チーム担任制の導入で、担任が一人で抱え込まずに済み、情報共有や生徒指導の早期対応が可能になり、安心して学級運営ができるようになった。

教科担任制により教材研究に集中できる時間が増え、授業の質が向上。特に若手教員にとっては準備の余裕が生まれ、成長の機会にもなっている。

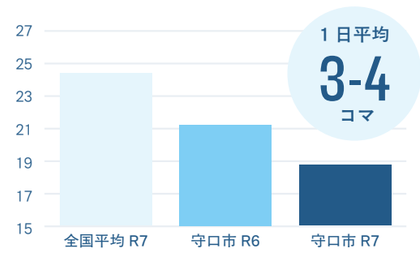
授業改善の向上につながった。苦手な教科の研究を深められ、好きになった。

教育の質を高める実践と働き方改革を両立

小学校の週あたり担当授業数（割合）



6 年生の週あたり担当授業数（平均）



教科担任制・チーム学年担任制の導入により、教員一人当たりの授業時数は大幅に削減されています。6 年生では、全国平均 24.6 コマに対し、守口市では 18.9 コマまで低減し、1 日あたり 3〜4 コマの水準を実現しています。こうして創出された時間を活用し、教材研究や授業見学、実践の共有など、教員同士が学び合う仕組みを構築しています。また、学びをつなぐ役割として学力向上推進教員を配置し、学校全体で授業の質を高める取り組みを進めています。なお、学力向上推進教員が本来の役割に専念できるよう、市費教員を採用し、業務負担の軽減も図っています。

働き方改革は
子どもたちの happy のため

「教職員が心身ともに健康であることが子どもたちの happy につながる」私が何度も繰り返していたフレーズです。欠席連絡のデジタル化によって学校に静かな朝が訪れました。時間外の電話には音声メッセージで対応し、業務に集中する環境を整えました。気兼ねなく休めるよう夏季閉庁日を１４日に拡大。冬季にも 12 日を新たに設定しました。教科担任制を全小学校で、チーム（学年）担任制は全校で導入、組織力が確実に向上しました。平日 1 時間の部活動は、顧問にも生徒にも余裕が生まれました。これらの改善は、今では理由のない、こうすべきという価値観を転換することで進めました。できることはすぐに着手すると宣言し、学校と市教委が手を取り、小さな改善を重ねています。教育の世界に外の風を招きたい思いで、TFJ 様と事業連携協定を結びました。フェローの仕事に向かう積極的な態度に教職員は良い刺激を受けています。今後もＴＦＪ、守口市の双方が高めていけることを願っています。



大阪府守口市前教育長

田中実さん

世界とつながる学びを、
チームでつくる

小学校で専科教員として 3〜6 年生に英語を教えています。もともとは「楽しく英語を教えたい」という思いが中心でしたが、TFJ の研修で「どんな世界を実現したいか」を考えたことをきっかけに、「英語というコミュニケーションツールを用いて、世界中の人とつながることのできる子どもたち」を育てたいと考えるようになりました。子どもたちには、英語でやり取りする楽しさを感じながら、多様な考え方や価値観に触れてほしいと思っています。勤務校は教科担任制（高学年副担任制）を導入して 2 年目で、日頃から先生同士が自然に声をかけ合い、支え合う雰囲気があります。専科として学年に所属していなくても、困ったときにはすぐに助けてもらえる環境があります。また、副担任制により担任の先生に時間的余裕が生まれ、外国語の授業では T2 として参加してくださることもあり、一緒に学びを進めています。チームで子どもたちと向き合うことで、より集中した学びにつながっていると実感しています。



フェロー第13期生

桑原 未裕さん

教壇に立って初めて余裕をもって授業ができている。教員どうしで子どもたちのことを話すことが明らかに増えた。

部活動の標準時間導入で教員の退勤が早まり、家庭との両立がしやすくなった。生徒も自主性が育ち、活動の質や集中力が高まったという声が多い。

電話対応が17時までのため、勤務後の電話に追われることがなくなり、業務に集中できるようになった。朝の準備にも余裕が生まれた。

Collective Impact

アセットマネジメント One との金融経済教育



近年、社会の急速な変化に伴い、子どもたちにとって金融経済教育は不可欠な学びとなっています。しかし、学校現場では専門性や時間の制約から十分に扱うことが難しい状況があります。こうした課題に対し、Teach For Japanはアセットマネジメントone株式会社で金融経済教育を推進する「未来をはぐくむ研究所」と協働し、教員の実践を支える教材を開発しました。教育は、学校や教員だけに委ねられるものではなく、産官学民の多様な主体が関わることで、より豊かで持続可能な学びが実現します。本教材は全7時間で構成され、指導案やスライド等も備え、教員が安心して実践できる環境づくりを支援します。子どもたちが「お金」とのよりよい関係を築き、未来を主体的に切り拓いていくための一助となることを目指しています。



アセットマネジメント One 株式会社
未来をはぐくむ研究所

五十嵐 さやか さん

TFJ と協働してみて

最初に「何を教えるか」ではなく、「子どもたちがどのような姿になるのが望ましいか」を徹底的に議論したことが印象的でした。その結果、お金の使い方の多様性・お金と社会とのつながりに気づいた上で、子どもたち自身が「どうお金を使うべきか」を考えることが重要であると再認識できました。Teach For Japan の皆様が持つ専門性を活用し、子どもたちが自ら考え手を動かすことで学ぶ教材を開発できた点、評価体系や先生方用の研修などを作り、学校で自走できる仕組みを構築できた点は、従来の金融経済教育と比較して大きな意義があると感じています。この取り組みが未来を担う子どもたちの成長に繋がることを願っています。



Teach For Japan 職員

川崎 淳一

アセットマネジメント One と協働してみて

アセットマネジメント One の皆様との協働の中で、金融のプロとして教育に対して想いを持って関わっていこうとする姿に私自身もエネルギーをもらっています。世の中には数多くの優れた教材が存在していますが、「教育現場でその教材の本領が発揮できたかどうか」は活用する側の視点にかかっています。本プロジェクトの価値は、企業が持つリソースと TFJ が培ってきた教育に関する知見を融合させる点にあります。専門知をただの知識としてではなく、子どもたちの学びの材料としてしっかりと昇華できるよう、今後も尽力していきたいと考えています。

和泊町×パナソニックHDとのSTEAMイベント





和泊町、パナソニック ホールディングス株式会社、Teach For Japanの三者協働により、STEAM教育イベントを実施しました。本取り組みは昨年に続く2回目の開催であり、地域の自然や文化に根差した学びと、企業の先端技術、教育の知見を掛け合わせた学びの機会を創出しています。3日間のプログラムでは、自由研究やプログラミングによる光の表現を通して、子どもたちが科学や地域への関心を深めながら、問いを立て探究する経験を重ねました。最終的には大阪・関西万博での展示にもつながり、自らの学びが社会と接続する実感を得る機会にもなりました。自治体・企業・NPOが連携し、それぞれのリソースと専門性を掛け合わせることで、社会全体で教育を支える“共助”のエコシステムを体現し、持続可能な教育変革につながる可能性を示しています。

STEAM イベント 関係者コメント



和泊町教育委員会

安田 拓さん

STEAM教育プログラムを通じ、TFJの皆様が子ども達一人ひとりの好奇心に寄り添い、伴走者としての視点で探求心を巧みに引き出しながら、島内の自然や日常にある「不思議」を再発見させてくれました。また、パナソニックHDの最先端技術と連携し、「万博」という世界への扉を開いていただきましたこと、心より深く感謝申し上げます。子ども達が目を輝かせながら制作した光のアートが、パビリオン（ノモの国）を美しく彩る姿を拝見し、我々行政にとっても大きな希望となりました。この素晴らしい出会いと学びの機会が、島の未来を拓くきっかけになると確信しています。



パナソニック ホールディングス株式会社

清水 俊之さん

TFJよりお声がけいただき、2年連続で沖永良部島を訪問する機会をいただきました。昨年は「プログラミング炊飯」の授業を九州で初めて実施し、地域に新たな学びの可能性と楽しさを届けることができました。今年は大阪・関西万博とのコラボイベントを通じて、離島発の教育実践を世界へ発信する機会へと発展しました。TFJがハブとなり、地域・企業・社会を巻き込みながら子どもたちの挑戦機会を継続的に創出していることに、大きな社会的意義を感じています。どの地域に生まれても可能性が制限されない社会の実現に、今後も強い志を持って共に取り組んでいきたいと思います。



Teach For Japan 職員

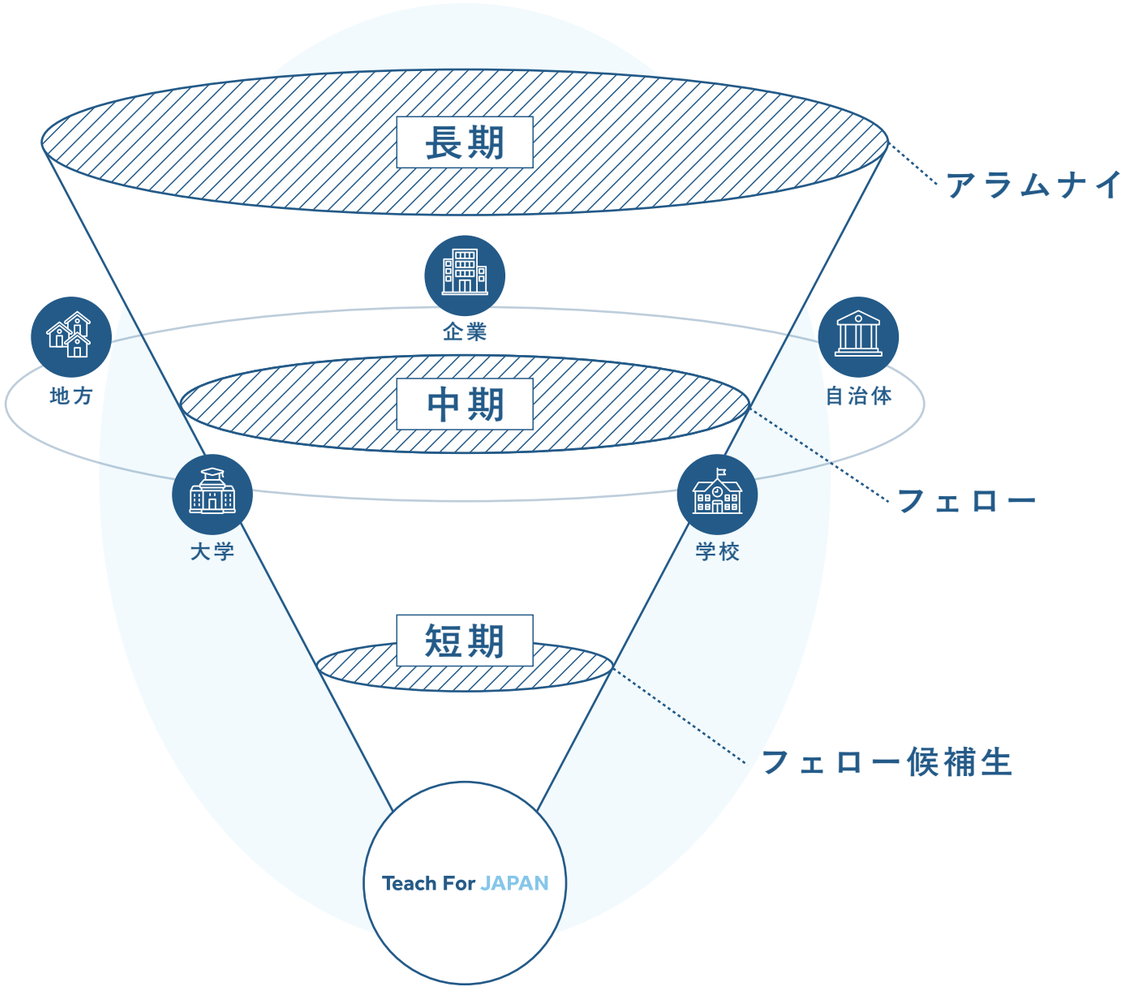
友弘 一志

今回のSTEAMイベントを通して、子ども達の目の輝きを強く感じました。初日は自由研究として地域を歩き、「なんで？」「どうして？」と問いを重ね、虫取りや実験を通して島を見つめ直しました。2日目にはILLUMME（IoT照明）を使い、本気で語り合いながら「2050年の沖永良部島」を形にしました。そして最終日、沖永良部島の好きなところを表現した作品は大阪万博「ノモの国」へ出展。作品が完成した瞬間のほっとした表情ややりきった安堵、そして「世界に届けるんだ」と目を輝かせる姿は忘れられません。教室だけでなく、地域や企業との協働からも子どもたちの可能性は大きく広がると確かな手応えを感じました。

Collective Leadership

教室から世界を変えていく
コレクティブ・リーダーシップ

教室での経験は、目の前の出来事だけでなく、その背景にある仕組みや構造へと視野を広げるきっかけになります。フェローシップ・プログラムを修了したアラムナイは、子どもたちと向き合った経験を原点に、学校、行政、NPO、企業、研究機関など、それぞれが選んだ場所で実践を続けています。自らの前提を問い直し、複雑な現実に向き合いながら、周囲とともに変化を生み出していく力こそ、TFJ が大切にするコレクティブ・リーダーシップです。そして、アラムナイが多様なセクターに広がることで、コミュニティとしてのつながりは分野を越えた協働を生み出し、社会全体に変化をもたらすコレクティブ・インパクトへと発展していきます。



「学校作業療法」の可能性を教師として探究

埼玉県でのフェロー期間中、「ノートを"普通に"書かない子」の背景に、書字への困難さがあったことを知りました。他にも、子どもたちは特別なことでつまずくよりも、とても日常的なことで困っていると気づきました。行動の背景の分析や参加の質を上げる方法をもっと学びたいと強く感じ、「学校作業療法」の先進的な取り組みを行う岐阜県飛騨市に移住。学校に専門家が入り日常の中で子どもを支える実践を、小学校教員として勤務する中で学んでいます。身体的・心理的・環境的要因を広く捉えることができる作業療法は、学校教育との親和性が高いと感じています。子どもが自分を知り、必要な支援にアクセスしながら力を発揮できる環境をつくる。飛騨での挑戦をモデルとして捉え、これからも現場からその可能性を体現していきたいと考えています。



池田 由利子さん
アラムナイ

教育委員会・指導主事として well-beingを支援

小学校現場を経て、教育委員会の指導主事２年目。市内各校の研修や授業づくりを支援しています。自分の掲げるビジョンは「自分も子どもも職場も持続可能な幸せ（well-being）と感じられる世界」。その実現に向け、知識注入型から、対話を通して実践や在り方・やり方・捉え方を問い直す「共創・対話型」への転換を目指しています（研修観の転換）。関わりを重ねるごとに、先生方のアイデアが広がり、笑顔が増え、授業改善が進んでいきます。先生方が元気になり、職場が明るくなると、子どももいきいきと輝き出すんですね。学校を俯瞰し、支援できることに、大きなやりがいを感じています。



岩崎 慶一さん
アラムナイ

NPOを立ち上げ広げる子どもの居場所

フェローシップ・プログラムの期間中に、長期休みの後、栄養の偏りにより極端に痩せたり、太ったりする子どもたちがいることや、親の経済状況により学びの機会格差が起こり、子どもの未来に大きく影響するということに気付かされました。そのため、2019年より無料の学習支援（勉強を教える活動）を開始。また、コロナ禍で3ヶ月学校が休校になるという事態に地域の子どもたちが給食を長期間食べられなくなることに危機感を覚え、子どものいる家庭向けにフードパントリー（無料で食料を配布する活動）を始めました。その他、こども食堂中間支援事業では、市内のこども食堂の数を２か所から７か所まで増やすこともでき、現在は市役所や社会福祉協議会と協働しながら、さらなる子どもの居場所づくりに従事しています。



関口 寿子さん
アラムナイ

教育リーダーシップを海外大学院で研究

教員や校長のリーダーシップと学校の組織的な変化に関心を持ち、アメリカの教育大学院へ進学しました。大学院では、学校教育改革の事例や教育リーダーシップに関する理論、教育研究の手法などを学んでいます。また、現地の小中学校でのインターンシップを通して、学びを実践に生かす経験を積んでいます。TFJでの赴任を通じて、教員が子どもの学習経験に与える影響の大きさを実感しました。そして、より良い実践や学校づくりには、教員個人の努力に加えて、それを支える組織や環境が必要だと感じました。フェローの経験で得た課題意識や考えが、大学院での学びを深めることにもつながっています。今後も子どもだけでなく教員や大人も学び続けられる学校の在り方、それを促進する教員の働き方や組織のつくり方について探究し続けたいと考えています。



米澤 新大さん
アラムナイ

Interview
対談

教室での学びが、地域へと広がっていく

福岡県田川市の小学校で出会ったフェローと子どもたち。その関係は卒業後も続き、それぞれの進路や地域との関わりへと広がっています。本鼎談では、フェローとして赴任した北さんと教え子 3名が集まり、当時と今の関わりがどんな影響を与え合っているかを語ります。



アラムナイ Alumni × 教え子 Student

Q：まずは、北さんとの最初の出会いと印象を教えてください。
（和多さん）最初は、担任ではない私たちにも積極的に声をかけてくれる先生だなと感じました。クラスや学年に関係なく関わろうとしている姿が印象的で、最初は少し戸惑うこともありましたが、担任になってからは、一人ひとりのことをよく見てくれている先生だと思うようになりました。
（荒川さん）私は「生徒中心の先生」という印象が強いです。何かを聞いてもすぐに答えを教えるのではなく、「どう思う？」と問い返されることが多く、最初は戸惑いました。でも、そのやり取りを重ねる中で、自分で考えることが当たり前になっていきました。
（石井さん）僕は4年生のときに、他のクラスの子たちと楽しそうに関わっている姿を見て、「いいな」と思っていました。だから5年生で担任になると聞いたときは、すごく楽しみでした。
（北さん）当時は教師1年目で、右も左もわからないし、授業もうまくできるのかわからないという状態でした。ただ、「子どもたちの話をちゃんと聞くこと」と「楽しいと思って帰ってもらうこと」は大事にしていました。そのために、一人ひとりと短くても対話する時間を意識的につくっていました。

Q：印象的だった出来事について教えてください。
（荒川さん）6年生のときの運動会です。コロナで多くの行事が中止になる中で、自分たちから「運動会をやりたい」と言い出して実現しました。種目も全部自分たちで決めて、今までにない形の運動会でした。先生が決めるのではなく、私たちに任せてくれていたのが印象的でした。当時は気づいていませんでしたが、裏ではいろいろ調整してくれていたんだと思います。やり切ったときは、「自分たちでつくった」という達成感がありました。
（北さん）安全面や学校内での調整は行っていましたが、あくまで主体は子どもたちです。「どうしたいのか」「なぜやりたいのか」を問い続けて、自分たちで決めてもらうことを意識していました。
（石井さん）全員リレーやオリジナルの種目など、普通の運動会ではできないことができて、とにかく楽しかったです。やらされているのではなく、自分たちでつくったからこそ、今でも一番印象に残っています。
（和多さん）私もすごく楽しかった印象が残っています。

Q：小学校での経験や関わりは、その後の自分にどのような影響を与えていますか。
（和多さん）私は将来について考えるきっかけをもらったと感じています。小学校の頃から「将来どうしたいか」を考える機会があって、その積み重ねが今につながっています。今は看護師を目指していて、高校では目標に向けて勉強するようになりました。
（荒川さん）北先生との関わりの中で、「まずやってみる」という姿勢を持てるようになったと感じています。高校生になって「たがわPlanners」に参加したのも、「先生がいるから行ってみよう」という気持ちがきっかけでした。小学校での関わりがあったからこそ、今の行動につながっていると思います。
（石井さん）一番大きいのは、「大人として扱われたこと」です。最初の授業で「あなたたちを大人として見ます」と言われたことを今でも覚えています。当時は意味が分からなかったですが、その言葉があったからこそ、自分で考え、責任を持つことを意識するようになりました。

Q：「たがわPlanners」に三人とも参加していると伺っています。その活動を通して、ご自身の考え方や行動にどのような変化がありましたか。
（荒川さん）たがわPlannersで活動する中で、地域の課題に向き合う面白さに気づきました。現在は副部長（2026年度からは部長）として運営にも関わっていますが、最初はあまり深く考えずに参加していました。
それでも、さまざまな人と関わる中で、自分の住んでいる地域をより良くしたいという思いが強くなってきたと感じています。また、活動を通して経営者の方と話す機会も増え、その中で「自分で経営することは面白い」と感じるようになり、今は将来、経営者として地域に関わっていきたいと考えるようになりました。
（石井さん）活動を通して、自分で課題を見つけ、周囲に働きかけるようになったと感じています。以前は与えられたことをこなす立場でしたが、今は自分から動くことを意識するようになりました。また、意見の違いがある中で、どのように伝えればよいかを考える経験も増え、それが自分にとって大きな変化だと感じています。
（和多さん）もともとは、小6の総合の時間で取り組んだ「理想の街・田川」で自分たちの班が選ばれなかった悔しさをきっかけに、自分たちが描く理想の街を実現したいという思いで活動に参加しました。最初は、街づくりというと建物をつくることだと思っていましたが、活動を通して、人との関わりの中で街がつくられていることに気づきました。今は、私たちのような高校生が地域のことを考えているということを多くの人に知ってほしいという思いで発信しています。特に、田川に対してあまり良い印象を持っていない人にも、実際に関わる中で見えてきた魅力や人の温かさを伝えたいと考えています。
（北さん）彼らが同じ場で、それぞれの役割を担いながら自分たちで考え、行動している姿を見ると、本当に成長を感じます。以前は関わらなければ進まなかったことが、今は自分たちで回っている。それぞれ変化の形は違いますが、「自分で考えて動くようになっている」という点は共通していると感じます。子どもたちの可能性は、関わり方や環境によって大きく引き出されるのだと実感しています。
注）たがわPlanners：地元高校生が、他の高校の生徒と協働しながら、田川の地域課題を解決していく高校生団体。田川市の「中小企業振興基本条例」をきっかけに議論が始まり、北さんも「たがわPlanners」立ち上げ当初から活動に参加しています。

Q：北さんご自身は、子どもたちからどのような影響を受けましたか。
（北さん）小学生でもここまでできるのか、という驚きがありました。自分たちで考え、提案し、やり切る姿を見て、「変わるべきは子どもではなく大人なのではないか」と考えるようになりました。また、環境や関わり方によって、人の可能性は大きく引き出されると実感しました。

Q：最後に、7年という時間を経て感じていることを教えてください。
（石井さん）当時は「大人として扱う」と言われても正直よく分かっていなかったですが、今振り返ると、その言葉があったからこそ、自分で考えて行動することが当たり前になっていると感じます。
（荒川さん）自分はやっぱり、「まずやってみよう」と思えたことが大きかったです。あのとき北先生がいたからこそ一歩踏み出せて、そこから今の活動にもつながっていると思います。
（和多さん）私は、いろんな人と関わっていく中で、人とのつながりの中で街ができているんだと実感するようになりました。今は、田川の魅力を自分の言葉で伝えていきたいと思っています。
（北さん）教師として関われる時間は限られていますが、その後の人生にも影響が続いていることに価値があると感じています。一人ひとりの可能性を信じて関わることが、社会全体にもつながっていくと信じています。



アラムナイ
森岡 真弥さん

教え子
笠原 悠吾さん

教室での出会いが、人生の選択を形づくる

教室での出会いは、その場だけの関係・影響にとどまらないことがある。教師と生徒としての関わりの中で育まれた信頼や対話は、卒業後も続き、互いの進路や価値観に影響を与えていく。本対談では、中学校で出会ったフェローと教え子が、当時の関わりとこれまでのつながりを振り返りながら、いまの人生にどのように影響しているのかを語ります。

Q：まずは、お二人の出会いについて教えてください。
（森岡さん）私が中学2年生の理科を担当したのが最初の出会いです。新卒で赴任したばかりで、授業の進め方も含めて手探りの状態でした。正直なところ、余裕はほとんどなく、日々の授業を成立させることで精一杯だったというのが実感です。ただ、その中でも一つだけ強く持っていたのが、「理科は楽しいものだ」と感じてもらいたいという思いでした。そのため、できるだけ実験を多く取り入れ、生徒が自分の手で触れ、確かめながら学べる時間をつくることを大切にしていました。
（笠原さん）最初の授業で「プレイフルな理科をやる」と話してくれたのを覚えています。当時はその言葉の意味を深く考えていたわけではありませんが、「実験がたくさんできそうで楽しそうだな」と感じたことははっきり覚えています。それまでの理科は座学中心だったので、新鮮でしたし、先生自身がすごく明るくてエネルギッシュで、教室の雰囲気が違うなと感じていました。
（森岡さん）当時は「主体的な学び」といった概念を明確に理解していたわけではありませんでしたが、「やってみること」や「触れること」が理解につながるという感覚はありました。当時は限られた時間の中でしたが、自分の授業ではそこにこだわろうと決めていました。安全面への配慮はしつつも、できるだけ実際に体験する機会を増やしたいという思いがありました。
（笠原さん）実際に授業を受けてみると、本当に楽しかったですし、何より記憶に残るんです。例えば化学の実験は今でも鮮明に覚えていて、高校入試の作文でもそのエピソードを書いたくらいです。自分でやったことは理解にもつながるし、テストのときにも「あのときの実験だ」と思い出せる。そういう経験があったからこそ、理科への興味が一気に高まりましたし、理系の高校を選ぶという進路にもつながっていきました。

Q：授業以外でも関わりがあったと伺いました。
（笠原さん）生徒会での関わりがありました。自分は2年生から生徒会に庶務として入り、3年生では会長を務めました。ただ、最初は本当にやりたくなかったんです。人前に立つのも得意ではなかったですし、「自分にできるのか」という不安が大きかったです。でも、先生に背中を押してもらって、やってみることになりました。



（森岡さん）生徒会については、「自分たちで考えて動く場」であってほしいと思っていました。もちろん、学校として必要なことや守るべきことはありますが、それ以外の部分については、できるだけ任せるようにしていました。やりたいことがあるのであれば、それを自分たちで形にする経験をしてほしいと考えていたからです。
（笠原さん）最初は戸惑いが大きかったです。何をどう進めればいいのか分からない状態からのスタートだったので。でも、自分たちで話し合い、決めて、実行していく中で、少しずつ「自分たちで決めて動くことの面白さ」を感じるようになりました。また、生徒会長として全校生徒200〜300人の前で話す経験もありました。もともと人前で話すことに苦手意識があった自分にとっては大きな挑戦でしたが、やり切ったことで自信にもつながり、自分にとって大きな経験になりました。
特に印象に残っているのは、人権集会で劇を企画したことです。台本も自分たちで作り、役割分担をして準備を進めました。大変でしたが、やりきったときの達成感は大きく、メンバー同士の結束も強まりました。
（森岡さん）最後にサプライズで呼ばれて、メッセージカードをもらったこともありましたよね。今でも大切にしています。
（笠原さん）ありましたね。あれも自分たちで考えて実行したもので、当時はあまり意識していませんでしたが、今振り返ると、ああいう経験の積み重ねが主体性につながっていたのだと思います。「自分で考えて動く」という感覚を、この時期に持てたことは、その後の自分にとって大きかったです。

Q：卒業後も関係が続いているのが印象的です。
（笠原さん）高校で一度つまずいた時期がありました。コロナ禍で生活リズムが崩れ、授業についていけなくなり、学校に通えなくなってしまったんです。その後、周りの方に支えていただきながら、進路変更を決断しました。新たな高校では、校風が自分に合っていたこともあり、問題なく通うことができました。また、対人関係にも恵まれ、通っていくうちに少しずつ新たな環境へ慣れていくことができました。そんなときに、森岡先生に近況報告や大学進学の相談をしたいなと思って、つながりをたどって連絡を取りました。
（森岡さん）連絡をもらったときは嬉しかったですね。ただ、何か正解を提示するというよりも、「どうしたいのか」を一緒に考えることを大事にしました。本人が納得して選ぶことが、その後の行動につながると思っていたので、そのプロセスに寄り添うことを意識していました。同時に、自分にとっても「教師としてどう関わるべきか」を改めて問い直す機会になりました。いまの関係性、いまの自分に何ができるのかを考え続けることが、そのまま自分自身の在り方にも影響していると感じています。
（笠原さん）「遠回りでもいい」「自分で決めていい」と言ってもらえたことは、今でも印象に残っています。また、家族や友人以外で気軽に相談できる大人がいることは私の中で大きな心の支えとなりました。そして、森岡先生の言葉に背中を押されて進路を見直し、今は大学で心理学を学んでいます。将来はスクールカウンセラーなど、子どもを支える立場になりたいと考えています。



Q：その背景には、ご自身の経験があるのでしょうか。
（笠原さん）はい。自分が悩んだときに支えてもらった経験があるからこそ、今度は支える側になりたいと思うようになりました。また、中学時代に経験した「自分で考えて動く」という感覚は、大学生活でも確実に生きています。授業以外の活動でも、自分から動くことに抵抗が少なくなりましたし、自分が興味を持ったことに対して「やってみよう」と思えるようになったのは大きな変化だと思います。
（森岡さん）教師として関わった時間は限られていますが、その後の人生に何かが残っているとしたら嬉しいことです。私にとっても彼らとの出会いは原点であり、数年後に再会し、そのつながりを実感できることに大きな意味を感じています。教室での関わりは、その後の選択や生き方に影響していく可能性があると感じています。また、子どもたちとの関わりの中で自分自身も大きく変わってきました。子どもたちから学び、関わり方を見直してきた経験が、現在の教員養成に関わるキャリアにつながっていると感じています。

Q：最後に、お互いの関係性を一言で表すとしたら？
（笠原さん）先生でもありながら、頼れる大人で、でも対等に話せる兄のような存在です。
（森岡さん）教え子でありながら、一人の大人として向き合う関係です。信頼し合い、必要なときに支え合える関係であり続けたいと思っています。
これまで出会ってきた子どもたちも含めて、そうした関係であり続けたいと感じています。

アラムナイ × 教え子

Alumni

Student

Interview

Community Assembly



10 月 5 日、フェロー・アラムナイ・候補生の総勢 66 名が集まり、「いま、この一歩が未来を変える」をテーマに、2050 年の社会と望ましい教育を対話し、参加者一人ひとりが明日から踏み出す行動を言語化する機会となりました。



田中 里奈 さん　アラムナイ

現場にいるとどうしても「目の前の子どもたちの今」に注力してしまいがちなので、改めて未来を見据えてこどもたちと接する大切さに気づくことができました。



塚田 菜那 さん　アラムナイ

多様な経験を経て熱い思いを持ったフェロー / アラムナイとディスカッションすることは未来に向けた行動へとても有意義でした。

Teacher's Day



10月5日、ユネスコが定める「世界教師の日」に合わせ、「教師の日ギャザリング2025」を開催しました。私たちは2015年より日本における「教師の日」を制定し、教師をエンパワーする取り組みを続けています。2025年は「教師を支える“あなた”のその一歩が、子どもたちの未来を変える」をコンセプトに、300名以上が申し込み、多様な参加者が集いました。セッション①では「子どもの学びをより良くする教職員・学校のチャレンジ」をテーマに、澤田真由美様、廣田貢様にご登壇いただきました。教育政策の動向や学校現場の実践事例を通じて、子どもの学びを中心に据えた学校づくりや教職員が力を発揮できる環境について考えました。セッション②では「教職の可能性は無限」をテーマに、高濱正伸様にご登壇いただきました。教育現場での経験をもとに、教師という仕事の可能性や尊さが語られ、「教育は最高の仕事である」という力強いメッセージが届けられました。セッション③では「『令和の日本型学校教育』の実現を支える教職員のエンパワーメント」をテーマに、田中実様にご登壇いただきました。守口市における学校改革の背景や、教職員がチームとして力を発揮するための実践と成果が共有されました。各セッション後には、参加者同士が対話し、子どもたちの学びをより良くするために自分ができる一歩を考えました。今後も教師の日の取り組みを通じて、教育に関わる多様な人々がつながり、支え合いながら、子どもたちの未来をともに育てていく社会の実現を目指します。

2026年 開催決定！

開催日
2026年10月4日（日）

開催場所
大手町プレイス ホール&カンファレンス

ご寄付いただいた企業の皆さま

MUFG 三菱UFJフィナンシャル・グループ / DOW / BARCLAYS / IG / EY Shape the future with confidence / DHL / MFS / CAS CAPITAL / YOKOHAMA / Paraca / THE LONGREACH GROUP / ASXiA / SBG MAVERICK

寄付インフォメーション

MONTHLY
毎月の寄付

月々 1000 円から
継続的にご支援いただける方

ONETIME
今回の寄付

1回 1000 円から
その都度ご支援いただける方

CORPORATE
法人サポーター

法人としての寄付や
協働・連携をご検討の方

遺贈

遺言により財産を特定の団体に寄付できる方法です。遺贈手続きに関わる専門家として三菱UFJ信託銀行様と提携しており、ご紹介することができます。尚、ご寄付は税制優遇の対象となります。

ふるさと納税

渋谷区のふるさと納税における寄付先団体になっております。2026年のふるさと納税の受付について、詳細が決まりましたらHPやメールマガジン等で改めてご連絡いたします。

東京マラソン

東京マラソン2027チャリティの寄付先団体になっております。チャリティランナーの募集開始は、2026年6月24日を予定しております。ご関心のある方は、Teach For Japanの団体HPよりお気軽にお問い合わせください。

ハチドリ電力

世界13ヵ国で社会問題に取り組む株式会社ボーダレス・ジャパンが地球温暖化を解決するために始めた電力サービス「ハチドリ電力」と連携しています。ご自宅や会社で利用される電気代の一部が寄付につながります。

バリューブックス

本で寄付をする「チャリボン」を運営するバリューブックスと連携しています。古本をご寄贈いただくことで、その買い取り額がTeach For Japanへの寄付につながります。ご家庭で不要になった本をお送りください。

ソフトバンク

ソフトバンク「つながる募金」は、毎月継続的に寄付ができる募金プラットフォームです。ソフトバンクのiPhoneやスマートフォンをご利用の方は、毎月の携帯電話の利用料と一緒に募金することができます。

ご寄付に関する詳細はこちら

https://teachforjapan.org/donation/

子どもたちの学びを支える力に

Teach For Japan　検索

300 名を超える社員様がボランティアに参加

法人サポーターの EY Japan 様、DHL 様、SMBC グループ様、Dow 様、ロングリーチグループ様から、累計約 300 名の方々に、集合研修（模擬授業）の児童生徒役としてご参加いただいています。授業への率直なコメントや応援・共感の言葉は、フェロー候補生の学びや励みとなっています。また参加者様の感想からは、ボランティア参加や教員支援など、多様な形で教育に関わり得るという実感の広がりがうかがえます。



応援メッセージ



東京学芸大学 教授
岩田 康之 さん

教員不足に悩む各教育委員会は採用行政の多様化を進めてはいるものの、異業種から教育界に転じる人は少ないのが現状です。そんな中で、Teach For Japanはフェローシップ・プログラムを通じて、様々な経歴を持つ人々を学校現場に送り込む実践を積み重ねてきました。学校での仕事の準備にフォーカスしたプログラムを、既に社会経験も教養もある方々に提供する試みは、既存の教育行政や大学等にはないユニークなものとして注目しています。



マンスリーサポーター
南谷 昌 さん

私がTFJに寄付を続ける理由は、かつて教員を志した経験があるからです。諸事情でその道へ進むことは叶いませんでしたが、TFJ を知った際、当時の情熱を思い出しました。日本の教育のために動く姿に心を打たれ、かつての自分と同じ夢を持つフェローの皆さんの力になりたいと寄付を始めました。スタッフの皆様、そして現場で奮闘するフェローの皆様、これからも心から応援しています。

団体概要 About Us

名称
認定特定非営利活動法人（認定 NPO 法人）
Teach For Japan（ティーチフォージャパン）

役員
代表理事：中原 健聡
理事：松田 悠介（Crimson Education Japan 株式会社 代表取締役社長）
理事：桜井 一正（BCG Managing Director & Senior Partner）
理事：川島 健資（元ドイツ証券 取締役副会長、元マネックス PB 株式会社 会長）
理事：田中 滿公子（元大阪教育大学連合教職実践研究科特任教授）
監事：齋藤 宏一（アンダーソン・毛利・友常 法律事務所パートナー、弁護士）

会員数
正会員数：12 名

職員数
（非常勤等を含む）：20 名

2025年度財務諸表

活動計算書

（単位：円）

	科　目	金　額	小計・合計
【A】経常収益	1.受取寄附金		67,514,716
	受取寄附金	67,514,716	
	2.受取助成金等		13,437,280
	受取民間助成金	4,789,280	
	受取補助金	8,648,000	
	3.事業収益		13,937,090
	事業収益	13,937,090	
	4.その他の収益		395,890
	受取利息	137,159	
	雑収入	258,731	
	経常収益　計		**95,284,976**
【B】経常費用	1.事業費		
	（1）人件費		43,902,144
	役員報酬	5,320,620	
	給料手当	33,467,989	
	法定福利費	5,093,635	
	福利厚生費	19,900	
	（2）その他経費		64,408,944
	荷造運賃	83,602	
	広告宣伝費	24,032,610	
	会議費	2,499	
	会場費	4,840,677	
	旅費交通費	5,631,449	
	通信費	1,752,125	
	消耗品費	30,588	
	事務用品費	68,368	
	水道光熱費	70,090	
	新聞図書費	583,630	
	印刷・製本費	238,821	
	諸会費	438,644	
	支払手数料	6,066,218	
	支払リース料	120,120	
	地代家賃	2,199,120	
	租税公課	11,900	
	支払保険料	35,005	
	支払報酬料	15,729,265	
	減価償却費	2,398,000	
	支払利息	76,213	
	事業費　計		108,311,088
【B】経常費用	2.管理費		
	（1）人件費		4,125,493
	役員報酬	591,180	
	給料手当	2,508,645	
	法定福利費	921,898	
	福利厚生費	103,770	
	（2）その他経費		7,784,212
	荷造運賃	5,621	
	会議費	192,986	
	会場費	82,794	
	旅費交通費	1,402,928	
	通信費	809,629	
	消耗品費	35,264	
	事務用品費	8,300	
	水道光熱費	30,038	
	新聞図書費	3,080	
	印刷・製本費	70	
	諸会費	638,923	
	支払手数料	334,581	
	支払リース料	51,480	
	地代家賃	942,480	
	租税公課	666,056	
	支払保険料	6,350	
	支払報酬料	2,573,632	
	管理費　計		11,909,705
	経常費用　計		**120,220,793**
当期経常増減額 【A】－【B】…①			**△ 24,935,817**
【C】経常外収益			
	経常外収益　計		**0**
【D】経常外費用			
	経常外費用　計		**0**
当期経常外増減額【C】－【D】…②			**0**
税引前当期正味財産増減額①＋②…③			**△ 24,935,817**
	法人税、住民税及び事業税…④		**70,000**
	前期繰越正味財産額…⑤		**90,089,105**
	次期繰越正味財産額③－④＋⑤		**65,083,288**

財産目録

（単位：円）

	科　目	金　額	小計・合計
【A】資産の部	**1.流動資産**		71,106,506
	現金預金		62,322,322
	普通預金 新生銀行/本店	44,839,805	
	普通預金 みずほ銀行/渋谷中央支店	5,165,554	
	普通預金 三井住友銀行/丸の内支店	7,170,842	
	普通預金 三菱UFJ銀行/京橋支店	5,055,013	
	普通預金 ゆうちょ銀行	90,866	
	普通預金 GMOあおぞらネット銀行	242	
	未収金		7,301,250
	受託事業	7,301,250	
	未収入金		9,756
	経費過払分等	9,756	
	前払費用		1,473,178
	その他諸経費	1,473,178	
	流動資産　計 …①		**71,106,506**
	2.固定資産		
	（１）無形固定資産		4,796,000
	ソフトウェア		
	CRMシステム	4,796,000	
	（２）投資その他の資産		**985,404**
	敷金		
	タイムズ24	80,000	
	長期前払費用		
	42Tokyo パートナープラン利用料	855,555	
	RJオフィス 保証料	49,849	
	固定資産　計 …②		**5,781,404**
	【A】資産合計　①＋②		**76,887,910**

【B1】負債の部	**1.流動負債**		
	未払金		5,774,293
	経費未払金 従業員立替	50,478	
	経費未払金 その他諸経費	5,723,815	
	預り金		370,129
	源泉所得税	189,762	
	住民税	133,200	
	雇用保険料	47,167	
	未払法人税等		70,000
	令和7年12月期確定申告分	70,000	
	未払消費税等		190,200
	令和7年12月期確定申告分	190,200	
	流動負債　計 …③		**6,404,622**
	2.固定負債		
	長期借入金		5,400,000
	新型コロナウイルス感染症特別貸付	5,400,000	
	固定負債　計 …④		**5,400,000**
	【B1】負債合計③+④		**11,804,622**
	【B2】正味財産　計（【A】-【B1】		**65,083,288**

貸借対照表

（単位：円）

	科　目	金　額	小計・合計
【A】資産の部	**1.流動資産**		71,106,506
	現金預金	62,322,322	
	未収金	7,301,250	
	未収入金	9,756	
	前払費用	1,473,178	
	流動資産　計…①		**71,106,506**
	2.固定資産		5,781,404
	（１）無形固定資産		4,796,000
	ソフトウェア	4,796,000	
	（２）投資その他の資産		985,404
	敷金	80,000	
	長期前払費用	905,404	
	固定資産　計…②		**5,781,404**
	【A】資産合計　①＋②		**76,887,910**
【B1】負債の部	**1.流動負債**		**6,404,622**
	未払金	5,774,293	
	預り金	370,129	
	前受金	70,000	
	未払法人税等	190,200	
	未払消費税等		
	流動負債　計…③		**6,404,622**
	2.固定負債		**5,400,000**
	長期借入金	5,400,000	
	固定負債　計…③		**5,400,000**
	負債合計　③		**11,804,622**
【B2】正味財産の部	前期繰越正味財産額		90,089,105
	当期正味財産増減額		△ 25,005,817
	正味財産合計		**65,083,288**
	【B】負債及び正味財産合計　【B1】+【B2】		**76,887,910**